【第１グループ】

第２回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.10.24（木）

開催場所：陸前高田市庁舎４号棟第４会議室

【第１グループ】

（1）参加者

第１グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
伊藤　昌子	おやこの広場　きらりんきっず	
村上　清	Ａｉｄ　ＴＡＫＡＴＡ	
紺野　文彰	通訳ガイド	
武蔵野　美和		
三井　俊介	特定非営利活動法人ＳＥＴ	
小野寺　浩樹	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
吉田　真	いちのせき市民活動センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
金澤　忍	えぇ町つくり隊	
菅野　秀一郎	陸前高田市商工会青年部	
坂井　ふき子	教員（中学校）	
永田　宗義	吉田燃料ガス事業	
武蔵　和敏	会社員	
小野寺　浩樹	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
吉田　真	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第２回の目標とゴール

【目　標】産業・観光、医療・福祉というテーマのまちづくりのイメージを深め、より具体化する。

【ゴール】予想以上に具体的なイメージが深まり、目標設定や建設的なアイデア出た。次回会議への期待感が高まる

（3）検討概要

※市民会議の進め方について共有

・産業・観光とテーマにあるが、産業という分野の中に観光産業も入っているので、とくに分けて議論するのではなく、自由に思いを語っていくスタイルで進めていく。

【産業・観光】前半グループ

・産業という分野は広いが、子育てがしやすい産業を発展させていけばいいのではないか。

→父親が産休を気兼ねなく取れる、家族と過ごせる時間が十分に取れるような、環境や制度や仕組みを確立していけばどうか？男性にも子育ての場に出るようになって欲しい。

・産業というと広い、農業、林業、水産業もすべてが産業。ただ、こういった１次産業も変わりつつあり、２つに分けられる。

→昔からある泥だらけになって畑仕事をするもの（泥んこ型）

→スニーカーを履いてでもできる米崎のグランパ農場ドームのようなもの（スマート型）

・泥んこ型は、グリーンツーリズムの一環として行えば交流人口の増加につながるのではないだろうか

・どの産業に関しても、泥んこ型（汚れ仕事）とスマート型（きれいな仕事）がある。その２種類の両方を持つことで、職業選択の幅が増える。

・若い世代が求めているものはスマート型、都市で生活しているユーザーが求めているものは泥んこ型

・スマート型がある１次産業は、若い世代が興味を持ち就業してくれることにより、定住人口の増加にもつながるのでないだろうか。

・１次産業が発展することにより、６次産業の発展へもつながる。

・若い人が興味を持てる１次産業とは何か？高田で１次産業をするメリットとは？

→魅力はやはり地形（海・山・川）、それと人柄。

・１次産業をお洒落に（こじゃれた）感じにしてはどうか、軽井沢のようなところみたいに。

→おしゃれなレストラン、フレンチやイタリアンに使用しそうな野菜の栽培。

・高田でなければできない、高田でしかできない「価値」というものをつける。

・高田のオーリーワンとなるようなもので価値をつける。（№1にならなくてもいい）

・オンリーワンを目指すのであれば、無理に決められた都市化をしなくてもいいのでは。

→歴史的な価値のある路地のあるまち。

→他の地域とは違った特徴あるまちにしていきたい。

○高田にしかないものとは何か？

・一本松（他の地域には絶対にない歴史的価値のあるもの）

・気仙大工（小友町が発祥の地だが、今は気仙地域全体の価値あるもの）

・気仙杉（気仙大工とともにこの地域を支えた。歴史的に価値ある船を作った材料）

・フルーツ（りんご、洋ナシ）

・年中通して花の咲く温暖な気候

・ツバキ、気仙茶、ゆず（北限シリーズ）

・高田の歴史と文化は、どの地域にも真似できないオンリーワンのもの。

・歴史や文化を、どのように明確していき、どのように外へと発信していくのか？

・まずは日本全国に周知、そして世界にも目を向け、高田ならではのものをアピールしていく。

※前半グループまとめ
・産業＝1 次産業の発展から、観光業および 6 次産業へとつなげていく。
・観光＝1 次産業と抱合せたグリーンツーリズムのようなもので交流人口を増やす。
　　＝歴史や文化のような高田にしかない価値あるものを確立し、交流人口を増やす。

【産業・観光】後半グループ
・前半グループの展開を見て、高田にしかないもの、高田でしかできないものがある。
・自分たちが求めているものとユーザーが求めているものは違う。
・産業に関して言えば、就業者とユーザーでは求める視点が違う（1 次産業のどろんこ型とスマート型のように）
・他の都市にはない高田にしかないものとは？
・陸前高田＝○○○○　←当てはまるものは？
→陸前高田＝高田松原、氷上山と気仙川、遠浅の砂浜
・住みたくなるような自然が豊富にあるということ。
・低地にメガソーラーを完備するなど、もっと震災後に外部から大きな企業が来ると思っていた。
・震災直後の 2 年目の産業の復興イメージと現実は、思っていたものと違っていた。
・産業がないと、やはり人口は減ってしまう。
・人口 1 万人規模のまちづくりも考えていかなければならないのでは？（最悪のことを考えて）
→人口が次第に減っていくことは、現実として見えてきている部分もある。
→そのことを踏まえ、問題となるものを解決することで、最悪の事態から脱却することもできる。

・仮設店舗での商業経営者の再興がまだ不十分である。
・統一感のある商業エリアを形成していくべきだし、そのいった動きを商工会でも頑張っている。
→商業をしやすいようなまちづくり、消費者が買い物しやすいまちづくり。
・商業経営者の今後の考えとして、新しく計画されている中心市街地で再興しようとする方と、今いる郊外で経営を存続しようとする方に分かれてしまっている。
・商業経営者全てが一緒のところでやれるなら、一緒のところでやった方がいい。一緒でやる方がメリットは多い。
→1 ヶ所で必要なものを全部買えると、消費者もありがたい。
→商業エリアのたくさん店舗があるとお客さんも集まってきやすい。
・場所はどこでやってもいいが、商業エリアには、市内の商業経営者に多く集まってもらい再興して欲しい。商業経営者も消費者も同じ考えだと思う。（コンパクトシティの考え方）

・産業というテーマでいえば、スポーツ産業はどうだろうか。
→年中温暖な気候といった言葉が前のグループで出ていたが、その通りだ。その気候をいかしてスポーツ関連の大会を開催したり、合宿地として誘致したりもできる。
→広田地区に野外活動センターもできる予定なので、抱き合わせも可能。

○スポーツ産業が地域に生み出すもの
・お弁当が売れる（スポーツの大会や合宿などで）
・宿泊施設に人が来る（団体が常に泊まるような宿泊施設は、経営も安定する）

・おみやげが売れる（スポーツ大会や合宿後に、観光地して帰ってもらうことにより）
・飲食業が儲かる（スポーツ団体の監督、コーチ、大学生、社会人などが外食することにより）

・年齢層問わず、スポーツ団体が大会や合宿を行うことにより、地元経済に何かしらの影響を与えることは確かである。スポーツ産業で盛り上げていくことは産業活性化へとつながるのではないか。
・スポーツ産業の発展のためには、しっかりとしたスポーツ施設が必要だ。
→岩手県の内陸にあるような総合型のスポーツ施設のようなもの。
・スポーツだけの利用施設にするのではなく、野外コンサートができるような多目的に使用できるスペースがあれば、年中人が集まるのではないだろうか。
・せっかく作るのであれば、運動公園も設備を充実したものにした方がいいのではないか。
→プロのサッカーチーム、バレーチームなどが公式の試合をできるような設備。
→復興支援でプロのスポーツ団体が市内に来ていて、つながりはあるはず。
・スポーツも 2 種類くらいに絞ることで、高田＝〇〇スポーツが盛んという独自性にもなる。
・高田の気候に関して言えば、冬場のスキーやスケートといったスポーツはない。むしろ夏場に行うスポーツの方が多いと思う。
・マリンスポーツも盛んだったので、砂浜の再生ももっと人の手で取り組む必要はあると思う。
→自然の力に任せてはおけない（再生するのはいつなの？といった話なので）
・スポーツに関する交流も夏場の方が多く、子ども達に関連したものも多いので、子ども達の夏休み休暇を岩手県基準にするのではなく、関東圏のように 8 月 31 日まで伸ばしたらどうか。
・市内には夏場に七夕行事もあるし、復興関係のイベントも多い。子ども達もあっという間に休みが終わってしまうような気がする。
・夏休みを長く、冬休みを短くといったように長期休暇を全国と合わせることで、子ども関連の行事やイベントも合わせやすいのではないだろうか。

・高田だけのものと言えば、商店街通りで行っていた市（いち）がある。
→商店街や市（いち）にいけば何でも買うことができた。買い物をしながら会話をすることで、人と人とのコミュニケーションも生まれていた。
・市（いち）には「言わずもがなのルール」があり、出店している方々には暗黙の了解があった。これは市（いち）に来る常連との間にもある。
→出店場所や販売する商品が決まっている（〇〇さんは、□□の場所で、△△を売っている）ということを出店者も市（いち）に来る人も、なんとなく知っている。
→少しぐらいのおまけは当たり前。いい意味でいいかげんで、常連ともなると、さらにいいかげん。
・市は、地元の方々にとっても他の地域から来る方々にとっても魅力的なもので、高田の価値ある文化の 1 つではないだろうか。
→地元の方々　　・・・何でもそろっているという利便性、地元の常連だという優越感
→他の地域の方々・・・市のおもしろいルールや仕組みの魅力。都市では決してない「おまけ文化」

・今後、昔からあった市文化を発展させるためには、今あるものを単に続けるだけではいけない。
→マンネリ化せず、常に刺激のあるもの提供し、市のスペースに空きがないように出店者も確保する。
・昔からあるものを残しつつ、新しいものを取り入れていくことで、より魅力あるものへ。
・子ども達も市（いち）へ行けるような取り組みとして、夜市などもあるとおもしろい。
→露店などがあると、子ども達はテンションも上がるし、中高生などはちょっとしたデートもできる。

・高田には七夕まつりがあるが、地元の人は祭りを見るというよりも、参加する方で忙しいので。
・市民が個人個人で楽しめる夜市のようなイベントは必要だと思う。

・お天皇様といった行事はある（今年は 7 月 15 日～22 日まで開催）
→ 1 週間だけ神様が本丸公園のお宮にやってくる。
→その期間だけは、夜になると歩行者天国となる道路があり、その場所に露店なども出る。
→今年はみこしだけ出して開催した。
・お天皇様は、子ども達だけではなく、親子、地域のお年寄りなど、どの世代にも楽しめるイベントだった。

※後半グループ
・新しい取り組みに、昔からある高田の文化や仕組みを取り入れることの重要性
・スポーツを通した切り口からの、産業と観光の発展
・商業経営者と市民がともに望む、コンパクトシティ化
・高田の市文化は、地域住民と来訪者の双方において魅力あるものだ
【産業・観光】ワールドカフェ後
・何事も陸前高田の中だけで考えてはいけない。
・市外に、県内に、国内に、世界に目を向けないと、産業は衰退し、人口も減り、確かに 1 万人規模の地域になるかもしれない。
・外の人を、外の産業を、もっと呼び込むことが重要なのではないだろうか。

・高田ならではものは、やはり人柄だと思う。
→言わずもがなのルールのように、外部の人にとっては魅力的な人柄をもっとアピールしていくことが必要なのではないか。
・人柄を知ってもらい、高田しかない魅力を知ってもらうことが、交流人口の増加につながるのではないか。

・交流人口を増やすことが、住みやすいまち、住みたいまちとは言えないかもしれない。
→外部の人にとって魅力的なものも、地元の人にとってそうとは言えないものもある。
→お互いが魅力的に思うことは違うので、地元視点とユーザー視点の両方を見据えたまちづくりが必要であり、交流人口を増やすためにはその点も気をつけないといけない。

○実際に産業や観光で交流人口を増やすためには？
・歴史探訪のプログラムを作り交流人口を増やす。
→そのためには、各部門との調整と整備が必要だ。
→ 一本松付近で言えば遊歩道の整備など、歴史に関わりがある場所ではハード面の整備も必要だ。
→郷土史をもっと子ども達に教育していくことも重要だ。

・震災後に継続して開催されるようになった「ツール・ド・三陸」や「太鼓フェスティバル」のようなイベントを今後も開催していくことも大事。（今後は剣道大会なども開催予定）
→こういったイベントをただ開催するのではなく、どう活かしていくのかがカギ。

→魅力あるイベントするためには、外に目を向けたアイデアも必要。

・1 次産業を活かした産業の取り組み。
・泥んこ型の 1 次産業体験型の研修プログラムを広め、学生や企業の方に来てもらう。
→学生よりも企業の方が、地元に落とすものは多い。
→日帰りではなく、民泊のような体験として。

・年中温暖な気候を活かしてスポーツ産業を盛り上げて行こう。
・スポーツ産業を通じてもたらされるものは多い。
→宿泊客の増加、お土産が売れる、飲食店が儲かる、観光産業にもつながる。

・陸前高田ならではの「言わずもがな」のルールがある。
→市内の方にとっては、なじみ深いもの、つながり、コミュニケーションも生まれる
→市外の方にとっては、独特なルールで興味がわく、都市部ではあまり見られないルール

・地元の方も来訪者も、お互いが満足するコンパクトシティ化に向けた商店街を形成。
→地元の方々　・・・1 ヶ所ですべての用事を済ますことができ、買い物も楽にできる
→来訪者の方々・・・訪問しやすい、地域の情報も得やすい

・陸前高田にしかない、陸前高田ならではの価値あるものを、のちには世界へと知ってもらう
・すべてを新しくする必要はない、新しいものに陸前高田が昔から持っているエッセンスを加えることで、地元の方も来訪者の方も満足できるまちとなる。

・目標とすれば、年間の交流人口を 10 万人にしていきたい。
・宿泊してくれるような方、地元にお金を落としてくれるような方を、年間 10 万人として！
・1 日に 400 人そういった方が来てくれれば可能だ。
→そういった方が 1 人 1 万円落としてくれれば、10 万人だと 10 億円の経済効果となる！
→2015 年までに交流人口 10 万人を目指して！
・そのためには、今あるすべての地域資源を最大限に有効的に使用することが必要である。
・宿泊施設も増やし、充実させて欲しい。
・統一性のあるイベントプログラムを確立させる（何月には毎年こういったイベントがあるなどといった内容を周知させる）
・これからの高田を担っていく産業は、第 1 次産業、スポーツ産業、観光産業、商店街や市場での商業ではないか。
・これらはお互いがそれぞれつながっているため、相乗効果で発展することも可能。
・高田にしかない価値あるもので、世界へと誇れるまちにしていきたい。

（4）検討経過

産業・観光	＜産業＞ ◎交流人口の増加につながる「泥んこ型」の１次産業 ◎若い人が就業に興味を持つ「スマート型」の１次産業 ◎1 次産業の発展から 6 次産業へつなげる ◎1 次産業をこじゃれたものにするなど、高田ならではの産業の形成 ◎統一感のある商業エリアの形成（人も店舗も街並みも） ◎スポーツ産業が地域に生み出すもの（弁当が売れる、宿泊施設に人が来る、おみやげが売れる、飲食業が儲かる） ◎スポーツ産業発展のために充実した施設を作るべき（野外コンサートなどもできる多目的な施設、プロリーグの試合もできる施設など） ◎市文化の発展させるためには、マンネリ化をさせず、空きスペースを無くし、常に刺激のある市となるようにする ◎経営者が商業しやすく、消費者が買い物しやすいまち ◎高田を担っていく産業は、第１次産業、スポーツ産業、観光産業、商店街や市場での商業 ＜観光＞ ◎日帰りツアーではなく宿泊ツアー（民泊も含めた） ◎歴史的に価値のある路地のあるまちなみを観光地として ◎歴史探訪プログラムを整備し、観光地として交流人口を増やす ◎ツール・ド・三陸や太鼓フェスティバルのようなイベントの継続 ◎交流人口を増やすために、宿泊施設の充実を。 ◎統一性のある観光イベントプログラムの作成 ＜産業＋観光＞ ◎グリーンツーリズムのような１次産業と抱合せた観光ツアーの実施。 ◎スポーツ大会や合宿地として高田をＰＲ ◎マリンスポーツを充実させる（砂浜の再生も早急に必要なのでは？）

	＜地域コミュニティ＞ ◎最悪のこと考えた人口１万人規模のまちづくり ◎経営者が商業しやすく、消費者が買い物しやすいまち（コンパクトシティ） ◎高田の市文化を利用したまちづくり（地域のコミュニケーションづくり） ＜地域コミュニティ＋観光＞ ◎言わずもがなのルール →地域住民には、なじみ深いもの、つながり、コミュニケーションも生まれる →来訪者には、独特で都市部ではあまり見られないルールなので、興味がわく ＜教育＞ ◎父親が産休を気兼ねなく取れる、家族と過ごせる時間が十分に取れるような、環境や制度や仕組みを確立。 ◎男性にも子育ての場に出るようになって欲しい。 ◎子ども達の夏休み休暇を岩手県基準にするのではなく８月 31 日まで伸ばす ◎郷土史を子ども達に伝える。 ＜高田の資源＞ ◎高田の魅力は、海、山、川、そして人柄 ◎気仙の歴史と文化は、どの地域にも真似が出来ないオンリーワンのもの ◎高田にしかないもの（一本松、気仙大工、気仙杉、りんご、洋ナシ、年中通して花の咲く温暖な気候、北限のツバキ、北限のお茶、北限のゆず） ◎陸前高田 ＝（高田松原、氷上山、気仙川、遠浅の砂浜） ＜その他＞ ◎個人個人の住民が楽しめるイベントも必要（夜市、お天王様） ◎地元視点とユーザー視点の両方を見据えたまちづくりが必要 ◎2015 年までに交流人口 10 万人を目指して！ ◎すべてを都市化するのではなく、新しいものに高田が昔から持っているエッセンス（ルール、伝統、文化）を加えることで、誰もが魅力あるまちへ。

産業・観光

産業 — 観光
広く考える
漁業
農業
林業
工業

交流人口を増やす仕組み

子育てに優しい産業のあり方

環境・制度・仕組み
父も育休をとる。

SETのような取り組みを広げる
泥んこタイプ —(交流人口を増やす)
ダンパ…スニーカーで農作業
それにスマートに農業 価値

1次産業への関り方は2種類
6次産業に (定住人口を増やす)

高田じゃなくてもできる。
高田じゃないと! 価値をつける。
人と自然。→ Only One
≠
No.1

高田じゃなくてもできる。
高田じゃないと! 価値をつける。
人と自然。→ Only One
≠
No.1

高田のOnly One

- 元仙スエ
- 元仙杉
- フレーツ ゆず
- 半間通して花が咲いている
- 椿油 — 次限シリーズ
- お茶
- 一本松

半甲湯屋
歴史と文化 = Only One
持続性を表に出す。

ユーザー視点は違う。

外部の企業が来ると思った。

(サージ) 仙台にメガソーラー。
外部企業いっぱい

人口減…産業がないと増加する。

仮設店舗の再興がまだ。

統一感のある商業エリア …景観にも発展

商工会で頑張っている。

1万人規模のまちの形成

仮設からの脱却

1人よりもみんなで集まる
一緒にやった方がメリットは大きい。

点在するよりはコンパクトにまとまる。

陸前高田 = ○○○○
高田松原
永上山
元仙山
遠浅の砂浜

スポーツ産業は起点。

半分層: 中高生
観光
飲食
お弁当
スポーツ
宿泊
お土産

せっかくつくる運動公園を
設備充実

ナッカ: コリーグとくむ
バレー: バレーボール協会
コンサートにも活用

公式試合
プロチームがくる
2種目くらいに絞るとか

元候を活かす。

夏休みを(若手基準ではなく)
関東に合わせる。
スキーもスケートもない
七夕で夏休みは終る

高高街・通り

ユーザー視点

言わずもがなのルール

高田だけの価値

禁止がしない

ローカルルール

けっこういのちがん

暗黙の了解

砂浜の再生…自然にまかせては、いつなの？

人とのコミュニケーション

子どもも楽しめる

そこに行けば、何でも揃う。

地元視点

夜市、お天皇様

7/15-7/22 の1週間だけ、神様がいる。

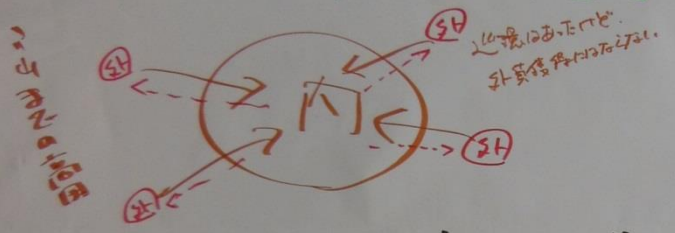
今年も神輿だけは、やった。

幻人幻人が楽しめるイベント（幻人の時間）。

七夕は、ずっとイベント（やってる例もつきっきり）

規制緩和（コンビニとかも）

新しいことに、昔からのエッセンスを追加



巡環はあったけど、外貨獲得にはならない。

中の人…外を見て考える

外の人…中に入る面白い

産業・観光は、交流人口を増やす取り組み

視点は2つ

- 地元視点
- ユーザー視点

観光

歴史・採前のプログラム

遊歩道をつくるとか

ツアープランをつくるとか

1次産業

深いタイプ

スマートタイプ

→6次化に展開

スポーツ産業

記憶を活かす。

宿泊・土産・観光

The 陸前高田

言わずもがなのルール。

コンパクト

高高街形成。

地元・未前に満足。

高田だけの価値 → 世界につながる

新しいことに昔からのエッセンスを追加。

2015年までに、

年間最低10万人の交流人口。

1人1万×10万人＝10億円/年。

今ある全ての資源を

精査すること事が必要

【第２グループ】

第２回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.10.3（木）

開催場所：陸前高田市庁舎 4 号棟第 4 会議室

【第２グループ】

（1）参加者

第２グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
菅野　好子	自立支援協議会	
菅野　秀一郎	陸前高田商工会青年部	
太田　明成	飲食店経営	
永田　宗義	吉田燃料ガス事業	
金澤　忍	えぇ町作りたい	
熊谷　耕太郎		
黄川田　美和	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐々木　牧恵	いちのせき市民活動センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
菅野　学	陸前高田市青年団協議会	
村上　清	Aid　TAKATA	
細谷　一		
紺野　文彰	通訳ガイド	
武蔵野　美和		
黄川田　美和	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐々木　牧恵	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第１回の目標とゴール

【目　標】「産業・観光」「医療・福祉」の新しいまちづくりのイメージについてより具体的意見を出し合う。

【ゴール】予想以上に意見（具体的イメージ）が深まった。

（3）検討概要

グループ２については「医療・福祉」について話を進める。

※今回メンバーの入れ替えが一部あり説明をしております。

→入れ替わりたいというのは医療・福祉が話したいという意味ではない。とのことから

趣旨を説明後、納得して頂き、他メンバーにも確認後スタート

①「医療・福祉」について具体的に話を進める前に、前回の振返り
②その後１人ずつ今日この分野で話していきたい事について述べていただいた。
＜「医療・福祉」について話したい分野＞
●バリアフリーについて
●仮設住宅の問題について……仮設住宅から出たくても出られない人もいる
●住環境整備について
●ボランティアがいつまで続くか。
●各種機関の集約（＝コンパクトシティ）の必要性について
●交通の便の悪さについて（交通に関しての相談が多いことから）
※対策として考えられるアイディア
・安価に交通の便を確保出来ないだろうか（障害者、高齢者対象）
・医療機関への通院にも各公民館からバスを出すなどといった事は出来ないか
　→バスの利用にあたっては専用のカード等を作ってみてはどうだろうか
・交通の便についての対策はコンパクトにならないと出来ない。

●障害者の考え・夢を誰がわかっているのか。
　→パフフォーマンスでしかない部分が多い（説明に関して）
・特殊学級に通っている子供達との交流をしてみてはどうか？（子供と子供　子供と商店街、など）
　→お互いの理解へ
・障害者はこれからの町にとって大事な存在であり、担って行く役割は大きい。

③出された分野について、どの分野から話していきたいか？
・コンパクトシティについての話は行政の中心の人達にもっていかなきゃ出来ないが、障害者の考えや夢については今でもできるのでは？
・これからの町づくりにとって、障害者がどんなことを考えているかは大事。
※この提案について、参加者の合意が取れたため、上記テーマで話をしていくことに。

④「障害者の考えていること」について
●自分のお店がどう見えているのかが気になる？（行きやすい？行きにくい？）
●そもそも障害者というのはどういった人たちを指すのか？
＜参加者のイメージする‘障害者’＞
・働けなくなった人
・高齢者
・いわゆる障害者（障害者手帳を持っている人）
・学校にいけない人
・弱者全般
・公営住宅の話をするときには高齢者も入る。
・「かくれ障害」というものがある（たくさんいる、親にはわからないが学校から指摘される）
　→極度の人見知りや、団体行動が苦手なだけでも「かくれ障害」と言われてしまう。

＝「かくれ障害」は誰でも持っているものなのでは？

津波の影響で誰もが心の障害を抱えている。

・声に出せない人が多い。声に出せない声を聞きとることが重要。

→同じ目線で考えられるかが重要！

●（障害者にとっても）交通の問題は大きい。予算がなくなれば（補助もなくなり）大変。

●障害者も納税者だという視点に立たなければいけない。

●「障害者」という言葉が独り歩きしている。「発達障害」とひとくくりに言っても、それぞれに個性がある。

→接し方はいろいろ。日常の中で寄り添うことが大切。

●最近は「壁」が低くなってきている。

⑤「声に出せない声」や「壁」とは何か

・「壁」は１人１人違う：暴れている事にも理由があり、すごく細かい事に対してだったりする

・障害がある人から目を背けて来た事自体が壁だったのでは？

※明確な返答が得られないままタイムアップ

グループチェンジ

①ここまでに出た話の振り返り

②その後１人ずつ今日この分野で話していきたい事について述べていただいた。

＜「医療・福祉」について話したい分野＞

●若者を戻そうという事が産業経済分野のテーブルで出たが、若者がここに残りたいという環境を作る事が必要ではないか（うばすて山にならない様に）。

●「この町ならみんな一緒に住めるんだ」と思える町づくりについて

→「普通の生活＝ノーマライゼーション」となるように。福祉に直結している問題。

●医療と福祉を高田の売りにしたい！

→「高齢者・障害者にやさしい町」として、オンリーワンのまちづくりを。

●若い人達もどんどん関わってくるような仕組みが必要。

●（自身が障害者手帳を持っており）「職」について関心がある。

→健常者と同じ職場で働けるような街にしたい。

→そのためにはどんな具体的が必要となるかを知ることが必要であり、知るためには交流が必要。

●ハンディキャップ体験を義務づけてほしい（工事をする業者や検査する機関に）。

●高低差をしっかり考え、科学的にも検証して欲しい。

●目の見えない人や耳の聞こえない人がどうやったら（高田に）住むことが出来るのか。

③「インクルージョン」について　（※参加者からの話題提供）

●これまでのような話は「インクルージョン」という概念に当てはまる。

・障害の有無や国籍や性別などに関係なく同等に仕事をすることをインクルージョンと言う。

（↑実際の定義は違いそうです…）

●インクルージョンを進めるためには能力開発が必要なのでは？

→その人は何が出来て何が出来ないのか知る事が大事

→職業訓練校とは違う、より広く様々な要素を見つけてくれる様な学校や施設が必要なのでは。

（※大学とは少し違う）

●（施設等は）初めからインクルージョンが可能なつくりにしなければいけないのでは？
（車いすの人にも目が見えない人にもＯＫなように）

→今はまちをデザインしている段階だから、今が大事なのでは！？

→バリアフリーの観点は（まちづくりには）当たり前の話。

●バリアフリーにも統一感を持たせることが大事では？

→・平泉のように条例化して、建物を建設する際には、スロープの取り付けを義務付けたり、平屋を推奨したり。

・総合医療の建物も、突如大きくコンクリートで作られた建物ではなく、統一感を。

→・公共施設だけではなく一般の家にも条例を盛り込むべき。

※釜石はバラバラになっている、高田は統一感を持たせ、優しい町にしていきたい。

●ハードとソフトをトータルに考えるまちづくりが必要では？

→街並みや環境については、ゆっくりと住民の声をきちんと取り込んでいってほしい。
（急ぐものとゆっくり進めるものとのスピードを考えて進めて欲しい）

●復興庁から「復興まちづくりの進め方」を提言してほしい。

※参加者が資料を持参。他の参加者へ見せる。

④「ハンディキャップ体験」について

●青年団体協議会で車いすの人と白内障の人のハンディキャップ体験を行った

→一本松のところまで行ったが、かなり時間がかかった。

→信号機　標識　トイレの段差　といった生活に密着している部分に危険があった。
そういうところから直していかなければいけないのでは？

●この様な体験を市民や行政職員も行うべきではないか？

→キャンペーンや体験ＤＡＹなどを設けてはどうか。

●「障害福祉計画」の会議に関わっているが、障害者施設、福祉施設でのヘルパーの不足が問題となっており、資格のないヘルパー（ヘルパーのヘルパーにするため）を養成してはどうかと思っている（ヘルパーの資格はなくも、知識があることで、ヘルパーの支えとなる）。

→まずは障害のある人を理解することが先決

→体験を通してわかる事がたくさんある

・障害のある人は待ってくれるだけでいい。時間はかかるが歩幅を合わせてくれればいい。

→子供の頃から体験しておくことが大切。

→妊婦さんや年配の方にとっても、必要となる

⑤その他

●福祉施設の中に、障害者や高齢者のニーズと、（そのニーズに対応できる）ヘルパーのマッチングが出来る人がほしい。

●障害者、高齢者、ヘルパー、を交流人口や定住人口につなげていけないか

→学校や養成施設を設置することにより、高田に生活し、高田で学び、その期間に町の良さを知ってもらうことで、交流や定住につながるのでは。

→そうした仕組みを高田の特徴にしていく事も考えてはどうか

●ノーマライゼーションを担保する条例が必要

→市全体として本当にやるのかを明確にするために、市議会でもどれくらい理解しているのか示してほしい。

元のグループに戻る。

＜ここまでに出た話の振り返り、話された内容について意見交換＞

①ヘルパーの養成施設について

・震災後すぐに大学誘致の話が出たがまとまらなかった。

●ヘルパー養成の施設を作ったからといって、ヘルパーになりたい人が増えるわけではないのでは。

→そのような学校を卒業しても福祉や介護の仕事に就かなかったり、すぐ辞めてしまう人が多い。

※業務の大変さ、給料の問題など　＝　日本全国共通の問題。

●ここまでの話は身体障害者についての話だ（よって自分たちのしていた話とは違うのでは？）。

→家に引きこもっている人などはどうすればいいか

②バリアフリーについて

●バリアフリーにも善し悪しがあり、逆に高齢者に不便な事もある。

→今はあえてバリアフリーにしない施設も出来ている。（筋力 up のため等）

→※条例化する前に検討をすることが必要　（条例化はできそうな動きが出ている）

③交流人口について

●人口流失は仕方がない問題である。

●ここに住み、ここで生まれる人を増やしていかなければいけない。

●赤の他人を増やすよりは（定住しなくても）交流人口を増やす方が良い。

→交流人口を増やすには思い切った事をしないとダメなのではないか。

→高田をリゾートシティにしては？

・カジノもありだと感じている（経済力も必要）

・（カジノは）豪華客船の中の方が良いのでは？

④ノーマライゼーションについて

●ノーマライゼーションという言葉を市民はどれくらい理解しているか。当事者（障害者）はどうか？

→岩手県にも条例があるが、職員も知らないのではないか？

（福祉担当者の窓口での対応が悪かった。担当者の研修が必要では？）

●高田のキャッチフレーズにもなっているが（？）知らない人が多いのでは？

●市民芸術際と障害者作品展を合同で開催してみてはどうか？

→イベントはいろいろまとめるべき

→取りまとめは商工会議所でやってはどうか

●高田は障害者は障害者で囲ってしまっている。そこを変えなければノーマライゼーションは推進できない。

●「飲食店にはこんな事をして欲しい」というようなｗｓなどをしてはどうか

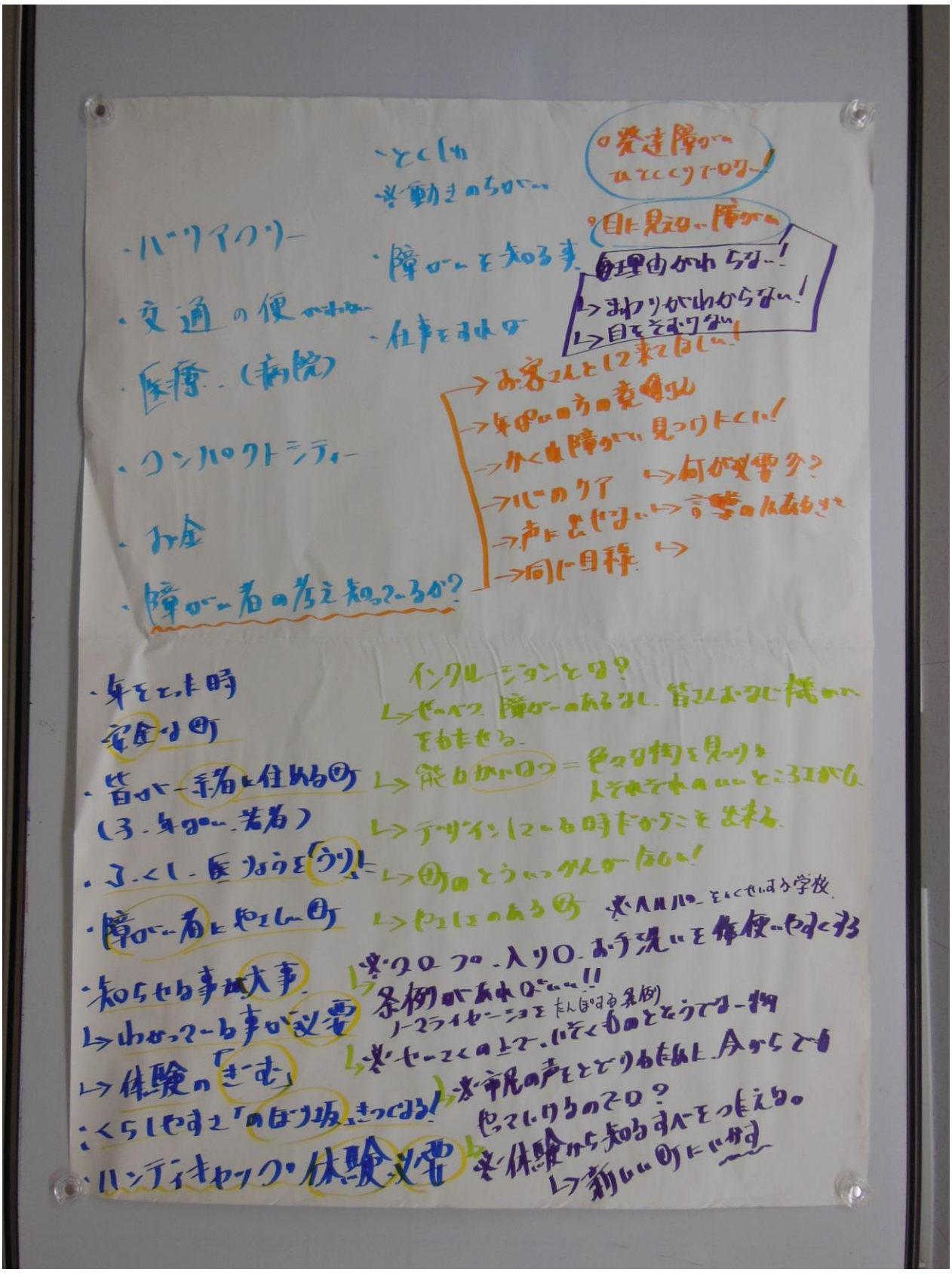
→飲食店組合や商店街としてｗｓをする事で障害のある人にも優しいお店づくりにつながる。

※障害を持っている人達のグチを聞く（お茶を飲みながら　声を聞く　グチを聞く）

※一方的な説明ではなく、交流からうまれる発見が必要（説明会ではなく交流会）

（4）検討経過

医療・福祉	≪医療≫ ・交通の便の悪さについて（交通に関しての相談が多いことから） ・総合医療の建物も、突如大きくコンクリートで作られた建物ではなく統一感を。 ≪福祉≫ ・医療と福祉を高田の売りにしたい！ ・「ハンディキャップ体験」の必要性 ・ヘルパーの養成施設について ・バリアフリーについて ・交通の便の悪さについて（交通に関しての相談が多いことから） ・障害者の考え・夢を誰がわかっているのか。 ・（自身が障害者手帳を持っており）「職」について関心がある。 ≪具体的な案として≫ 「飲食店にはこんな事をして欲しい」というようなｗｓなどをしてはどうか →飲食店組合や商店街としてｗｓをする事で障害のある人にも優しいお店づくりにつながる。 ※障害を持っている人達のグチを聞く （お茶を飲みながら　声を聞く　グチを聞く） ※一方的な説明ではなく、交流からうまれる発見が必要 （説明会ではなく交流会） ≪その他≫ ・福祉施設の中に、障害者や高齢者のニーズと、（そのニーズに対応できる）ヘルパーのマッチングが出来る人がほしい。 ・障害者、高齢者、ヘルパー、を交流人口や定住人口につなげていけないか ・ノーマライゼーションを担保する条例が必要



・バリアフリー

・交通の便がわない

・医療（病院）

・コンパクトシティー

・お金

・障がい者の考え知ってるか？

・とくしゅ

※動きのちがい

・障がいを知る事

・仕事をすれば

○発達障がい
ひとくくりでない！

○目に見えない障がい

理由がわからない！
→まわりがわからない！
→目をそむけない

→お客さんとして来てほしい！
→年ぱいの方の意見
→かくれ障がい見つけにくい！
→心のケア →何が必要か？
→声に出せない →言葉の人あるさ
→同じ目線 →

・年をとった時
安全な町

・皆が一緒に住める町
（子、年ぱい、若者）

・ふくし、医りょうを「うりに」

・障がい者にやさしい町

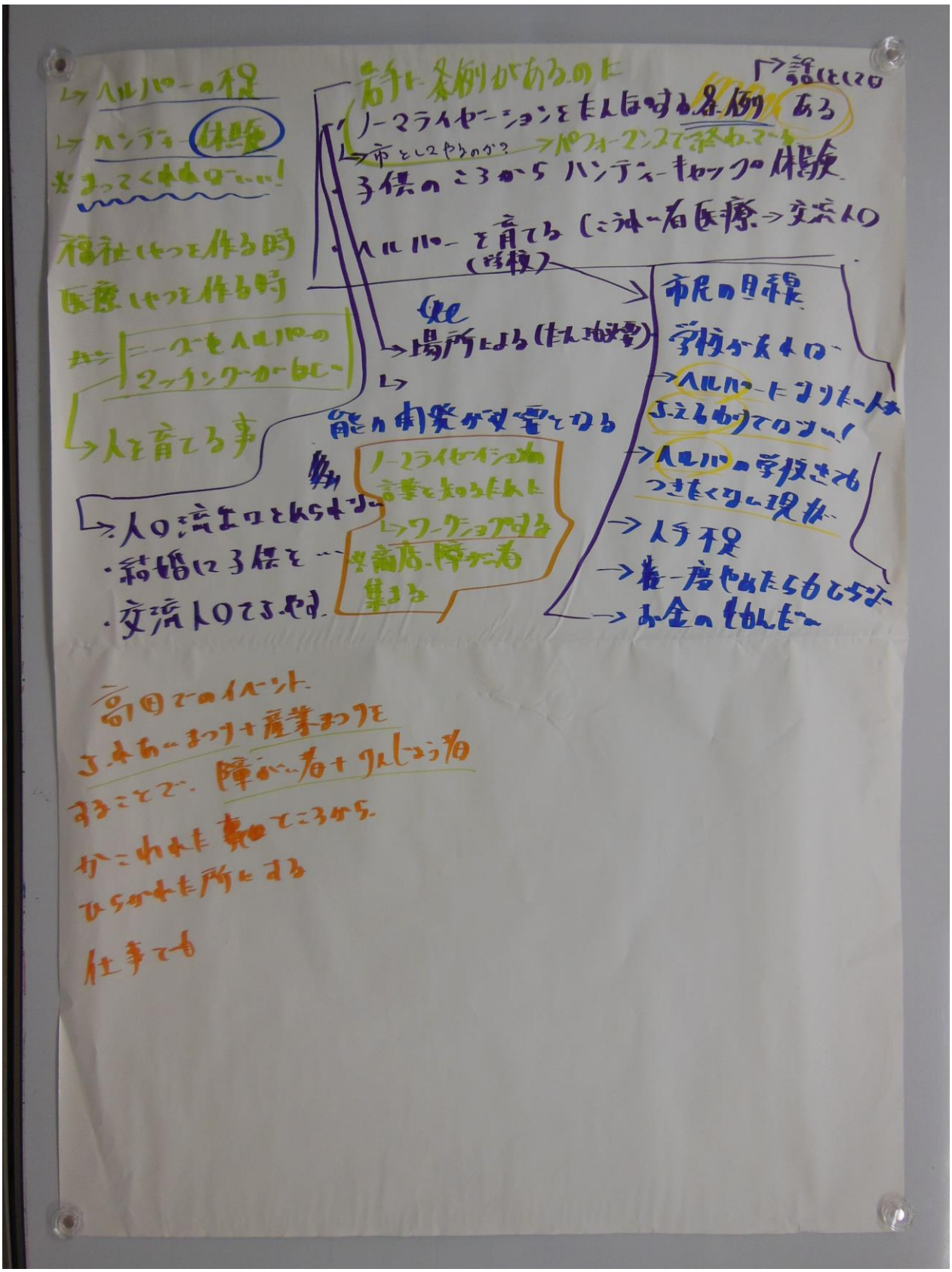
・知らせる事が大事
→わかっている事が必要
→体験の「きむ」

・くらしやすさ「のぼり坂」きつくなる！

・ハンディキャップ・体験必要

インクルーションとは？
→ゼーベつ、障がいのあるなし、皆さんおなじ機がいをもたせる。
→能力がいはつ＝色々な物を見つける
人それぞれのいいところ工がん
→デザインしている時だからこを出来る。
→町のとういつかんがない！
→やさしさのある町 ※ハルパーをいくせいする学校

※スロープ、入り口、お手洗いを作使いやすくする
→条例があればいい!!
ノーマライゼーションをたんぽする条例
→※ゼーさくの上で、いそくものとそうでない物
→※市民の声をとどりもたれ上、今からでも
やっていけるのでは？
→※体験から知るすべをつたえる。
→新しい町にいかす



↳ ヘルパーの不足

↳ ハンディー体験

※まってくれればいい!

福祉しやつを作る時

医療しやつを作る時

ニーズをヘルパーのマッチングがない

↳ 人を育てる事

↳ 人口流出はとめられない

・結婚して子供を…

・交流人口でふやす

若手に条例があるのに

↳ 話はしてる

ノーマライゼーションをたんなる条例ある

↳ 市としてやるのか? → パフォーマンスで終わってる

・子供のころからハンディーキャップ体験

・ヘルパーを育てる(こうれい者医療 → 交流人口

(学校)

→ 場所による(たん地必要)

↳ 能力開発が必要となる

ノーマライゼーションの言葉を知るために

↳ ワークショップする

※商店、障がい者集まる

市民の目線

学校がたれば

→ ヘルパーになりたい人がふえるわけではない!

→ ヘルパーの学校さてもつきたくない現状

→ 人手不足

→ 一度やめたらもどらない

→ お金の也もんだ

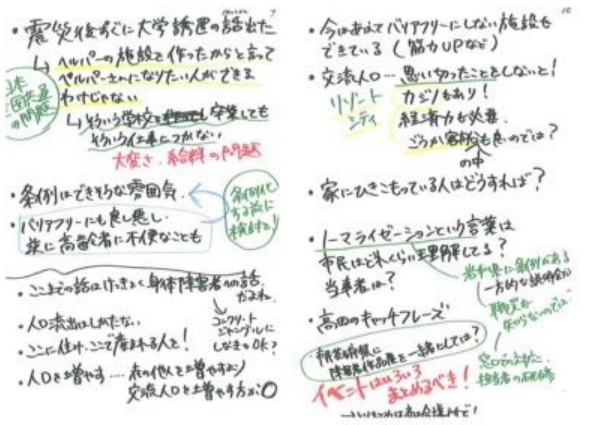
高田でのイベント

ふれあいまつり+産業まつりをすることで、障がい者+りんじょう者

かこわれた裏のところから

ひらかれた所にする

仕事でも



トイ
高田は障害者は障害者でかこって
しまっている。それを変んなきゃ
ノーマライゼーションはムリ
↓
わいわいは実践場体験OK!

【第 3 グループ】

第 2 回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.10.24（木）

開催場所：陸前高田市庁舎 4 号棟第 4 会議室

【第 3 グループ】

（1）参加者

第 3 グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
及川　満伸	陸前高田市消防団	
菅野　学	陸前高田市青年団協議会	
石川　浩行	青年会議所	
細谷　一		
松田　邦子	陸前高田市女性団体協議会	
三浦　まり江	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐藤　大輔	いちのせき市民活動センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
菅野　好子	自立支援協議会	
太田　明成	飲食店経営	
熊谷　耕太郎		
松本　直美	陸前高田市観光物産協会	
（氏名非公開）		
三浦　まり江	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
佐藤　大輔	いちのせき市民活動センター	グループ記録

（2）第 2 回の目標とゴール

【目　標】産業・観光、医療・福祉の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。

【ゴール】予想以上に具体的イメージが深まり、目標設定や建設的アイデアが出た。
次回会議へ期待感が高まる。

（3）検討概要

【テーマ】産業・観光

＜グループ討議①＞

・支援も限界がある。その後の福祉

→震災をマイナスではなくプラスにとらえる。

【1 次産業を元気にするためには？】
・気仙川の活用。
→以前はあさりが取れた。また、水質が良いので気仙川河口から繋がる広田湾のかきは良質。
・1 次産業（農業・漁業）と加工が今はバラバラに動いている。そうではなく、みんなで協力して（6 次化）
・若者の雇用の場＝帰って来られる場を。
・1 次産業をかっこいいものに PR。
・学校で農業を学んでも、戻ってきて就農できないという現状がある。
・専業農家は遊休農地を持っている。それを農業希望者に貸出すことはできないか？
（例）ドイツの農地借用の事例紹介
→農地の一定期間貸出。簡単なところから
→交流人口アップに繋がる。
→仲介役を誰が担うのか？

【1 次産業と観光】
・地元で採れる水産物（含む地場産品）をいかに PR、加工して売り出すかを考える。
・産物の加工→土産化→産業化→観光の循環。産業から観光までの流れが出来ることでお金を落としてもらうことに繋がり、雇用にも繋がる。
・観光客にお金をまちに落としてもらうためにはお土産が必要。そのために、世代を対象化し、買って帰る楽しみが持てるような土産商品を開発する。（例：青森こんぶようかん）
・若い人のアイデアを取り入れたい。
・ここで何が出来るのか、専門家と勉強してもいいのでは。
・先日の台風でりんごが落下してしまった。こういったものを再利用してのスイーツづくり。（落下リンゴ、形態のいいものの利用など）
→既に今米崎りんごを使ったビールが商品化、販売されている。
・汎用性のある農産業の加工場。
・生活の場＝職場。労働力を確保したい。
→福祉施設利用者が分担して農作業を行う施設は既にある。彼らに軽作業に従事してもらうことで、労働力確保に繋げる。
→コーディネート役が必要。

【民泊】
・遠野で実施しているような、民泊をしながら自然、農業に触れてもらう体験（簡単なことを体験する）。
→もてなしすぎて疲れてしまうと続かない。経営できるように研修会等を実施して。

＜グループ討議②＞
前半の第 1 次産業活性化の話から
【体験を通した交流】
・農業・漁業体験の企画を実施する予定。とれたもの（とったもの）を飲食店に持ち込んで使ってもらう。対象は都会の子ども達 15 名程度。交流人口の増加、担い手の獲得に繋がれば。
→自分でとったものを食べる喜びを体験。

→野菜を作った人、料理した人との交流が出来る。
（例）AM：漁業体験→とったものを飲食店で調理して食べる
　　PM：農業体験→鍋パーティーをする（簡単な調理）
→大人数の受け入れは、容量的に難しい。また、日程の調整も必要。
・課題は宿泊場所。泊まる所の確保が現状難しい。

【修学旅行の誘致】
・体験の話に関連して、修学旅行の問い合わせが寄せられている。観光物産協会では現在情報を収集中。やはり宿泊場所確保と、修学旅行なので食事が非常にシビア（保健所等）。
→宿泊と食事場所の整備が急務。
・食事場所については、40～50 人で有れば現在時点でも受け入れは可能。複数個所に分かれるとなれば、各飲食店に割振りできるのでは。
・宿泊場所の候補としては今ある二又交流センターだが、収容人数が修学旅行を対象に想定すると少ない。今後建設される計画があるものでは広田に予定されている野外活動センター。
→テントや公民館を利用できないだろうか。
→民泊という手段もある。一家庭に 5～6 人、それが 10 件あれば 50～60 人規模には対応できるかも。高田のひとの暖かさを感じてもらえる。
・体験メニュー案：地引網（以前は高田にあったプログラム）、釣り船など
→地引網が現在どこで実施できるのか？釣り船は法律、港の問題がある。

【受入プログラムについて】
・高田にお金を落としてもらいたい！
・大きい観光地に人が取られる、ガイドだけ使って帰ってしまうという現状。
→変化をつけたい。今注目されているので、成功すれば事例になる。
・人数に合わせた受入先のリスト化、体験したい内容・プログラム毎に企画をまとめ、リストをもとに旅行をコーディネートできないか？一か所で対応できないものを市内に分散させることで、受け入れられる状態に。
→今のツアーは旅行代理店が企画している。ツアープランを内部で作るとなると、企画はあっても仲介役が出てこない…
→出来るだけ受け入れているところもあり。ニーズに合わせた対応も出来る。（例：ヤルキタウン）
・姉妹都市を提携している所との交流を起点に出来ないか？
→姉妹都市を結んでいる市町村はないが、協力関係の都市はある。また、市長は青年市長会に入っており、そこでの繋がりがある。そこから修学旅行を高田に誘致！

【復興グルメ大会の誘致】
・復興グルメ大会（既に市内商店街が参加）というイベントが開催されているが、高田の人はあまり知らない。（高田が会場ではないため）
→集客力の高いイベントなので、高田に大会を誘致・開催したい。これにより、高田を発信することもできる。

＜グループ討議③＞
・宿泊施設が増えて、それで交流人口が増えるのか？

【民泊について】
・民泊は許可を取るのが難しく、まして修学旅行の受け入れはハードルが高い。管理人も必要になる。
→実施しているところは全国にある。まずは制度や事例を調べる。
・仮設を民泊で利用できないか？
→住田で実施の予定がある。仮設住宅での生活の厳しい側面も体験してもらう。
→解体費用と民泊実施にかかる費用次第では検討の価値があるかも。

【大人の修学旅行】
・震災（防災）と教育旅行を掛け合わせたツアー。
→震災の話を始めると、1 泊 2 日のような短期スケジュールの修学旅行には向かない。子供に短い時間で知ってもらうのは大変。
→対象を大人にする。大人の修学旅行（教育旅行、社員旅行など）。大人からのニーズはあるのでは。
・農業・漁業体験と組み合わせた旅行では、産業を掘り下げたい。
→PR「来ないと食えない」。高田には山、川、海すべてある。特筆する産物はないけれど、どれも美味しいものばかり。これを活かしたい。
→作業体験と組み合わせて、この季節に来ないと食べられないものを食べてもらう。(節でプラン化)。食べるのは作業を体験、手伝った人だけ、として。

【山・海・川の案内人】
・山・海・川のエキスパート（案内人）を育成する。案内人がそれらを紹介することで、後継者となる若い人を育てる。交流人口の増加、定住促進に繋がるか。
→「高田に来るといろいろできる」と思ってもらい、そこからリピーター確保、定住へ。

【人を呼ぶためにどうしたいのか？】
・人は呼びたい。そこで、自分たちはどうしたいのか？
→受入の体制・整備（アクセス）・計画作り。
・どちらかというと＜グループ討議①＞はソフトの話、＜グループ討議②＞はハードの話という印象。ソフトができて、ハードが実施できる状態になる。

（4）検討経過

産業・観光	＜産業＞ ◎第 1 次産業を活かした産業→観光の循環（6 次産業化）。 ◎生産→加工→商品化・販売→観光のループ。そこに雇用もできる。 ◎高田にお金を落としてもらう仕組み。そのためにお土産（商品）づくり。 ◎遊休農地の活用から就農・定住へ。 ＜産業＋観光＞ ◎農業・漁業体験を通した交流人口の拡大、担い手確保。 ◎修学旅行の誘致。（1 次産業の体験、民泊等を組み入れたプラン） ＜観光＞ ◎震災＋体験の大人の修学旅行提案。 ◎ツアーの食事場所は市内飲食店に分散も一手。体験メニューもあわせての企画をいくつか用意、リスト化することで選択できるようにする。 ◎宿泊場所の整備は急務。民泊という手法もある。 ◎仮設住宅を利用した民泊特例。事例、制度の下調べ。 ◎地域の魅力の発信→海、山、川の案内人による紹介。そこからの交流、リピーター確保。 ◎「特出した産業がない」ことを活かした、季節で変わる体験プラン作り。「節のものを提供する」をコンセプトに、行かなければ食べられない・体験できないメニューを提供。（春なら○○、夏なら○○…など） ＜実現に向けた課題＞ ◆すべてに共通して、仲介役（コーディネーター）を担えるひと、機関。 ◆ハード面では宿泊場所、食事場所、アクセス等の整備。 ◆民泊、農地活用等はまず制度、事例を知る事が必要。 ◆土台となる産業をまず活性化。

産業・観光

震災をマイナス
↓
プラスへ！

生活＝職場

産業
一番大事

計画をしっかり立ててみよう！

交流人口

定住 しやすいまちたかた

ボランティア
きっかけ

田舎は
財産を捨ててる

民泊
遠野で実施

1次産業を元気に

かっこよく！

農・水・漁
みんなで協力

スペシャリスト
実力人を育てる

お例しで
農地借用

労働力の確保

1 福祉施設の人たち

気仙いPR

かほおいしい

学校で農を学ぶ
↓
就農できない

高田の山・川・海
（特集は産業を（例）
こもどれもうまい！

誰？やる

仲介は
（JAさんに）

農地借用
（例）ドイツ式

内陸・仮設商店
協力商店
との交流

漁

海産物
↓
加工
↓
土産化
↓
産業にする
↓
観光にする

6次

若い人の了行行

高田にお金を

産業→観光
産業
観光
高品化
高品化
おみやげ買う
ターゲット化

雇用につながる

民泊
評判がずかしい

管理人どうする？

1次産業

農業体験
漁業体験

担い手

省会の
（2）子どもたち
（15名くらいで
実施予定）

交流人口
増やす

復興グルメ大会
集客力高

高田に誘致

高田を発信

震災を教育旅行
社員旅行

対象は大人
1次→6次化
産業を掘りたげる
来ないと食えない
（農のものを通年で）
↑
体験者に

農業と漁業つながり

人数多いと
買入大事

とれたもの
↓
食べる

宿泊は
むずかしい……

修学旅行
誘致

お金をなるべく高田に

（具体案）

漁業体験 ― 地びきあみ
漁業体験 ― 漁協が仲介とか
漁業体験 ― 農業やんりーが仲介

プランを
いかける
くっくってみて

共有
やってるんいっぱい

体化

ニス？…収容少

野外活動
センター

宿泊
食事
熱海危険

民泊
（5人6人でいかない）

食事場所
40人50名
分でも受入れ

食事にこだう
保険所厳しい……

1つ行っても
複数の所に分散でも

かりいつ差？
まずやってみる

旅行仲介 ― 旅行会社
↑
観光協会で情報収集

食・泊・ルートのプランリスト

まず小さな成功例をつくる
↓
つなげる

【第 4 グループ】

第 2 回　陸前高田市新しいまちづくり市民会議

開催日時：H25.10.24（木）

開催場所：陸前高田市庁舎 4 号棟第 4 会議室

【第 4 グループ】

(1) 参加者

第 4 グループ参加者名簿

＜グループ討議①、③＞

氏名	所属	備考
松本　直美	陸前高田市観光物産協会	
（氏名非公開）		
坂井　ふき子	教員（中学校）	
武蔵　和敏	会社員	
高梨　信之	作業療法士	オブザーバー （グループメンバーの了承により参加）
酒井　菜穂子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
鈴木　麻里子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

＜グループ討議②＞

氏名	所属	備考
伊藤　昌子	おやこの広場きらりんきっず	
三井　俊介	特定非営利活動法人 SET	
松田　邦子	陸前高田市女性団体協議会	
及川　満伸	陸前高田市消防団	
石川　浩行	青年会議所	
高梨　信之	作業療法士	オブザーバー （グループメンバーの了承により参加）
酒井　菜穂子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ進行
鈴木　麻里子	陸前高田まちづくり協働センター	グループ記録

(2) 第 2 回の目標とゴール

【目　標】「産業・観光」「医療・福祉」の新しいまちづくりのイメージについて、より具体的意見を出し合う。

【ゴール】予想以上に具体的イメージが深まり、目標設定や建設的アイディアが出た

(3) 検討概要

○確認事項

・ゴールの確認…特に意見無し
・席の移動について…再度説明
・進め方について…4 グループでは、前回「医療・福祉」に関する意見が出ていないが、進行に際し、他グループで出された意見をもとに議論進める提案をいただきメンバーに確認。

○「医療・福祉」における新しいまちづくりのイメージ

グループ討議①

○高齢者にやさしいまち

【仮設住宅・災害公営住宅】
・高齢者が多いコミュニティとなった時にサポートできる体制作り
・年齢や資金面等の理由から、高齢者は災害公営住宅に移り住む人が多いと思われるが、公営住宅が高齢者だけになった時が心配。（空き室が目立つなど）
・集会所があっても出てくる人と、出てこない人。出てくる人は、孤独死しない。
・今のうちから、高齢者が集まったコミュニティでの医療・福祉を考えていかなければならない。
⇒
☆『見守り』という意味で、戸別にカメラを設置するなどの対策を講じる。
☆住む場所という問題だけではない「生きがい」の場所を作る。
→集会所以外でも、集まり、参加できる場所。子どもたちと一緒に関われる家庭菜園など
☆他地域での例をもとに、空室をうまく利用する。
→若い人が出た後に外国人の労働者等が入ってコミュニティを形成した例（大阪）がある。
☆公営住宅の中に、医療・福祉サービスを設置もしくは併設する。
→福祉団体（グループホームやデイサービスなど）を入れる、設計段階から専門家の意見の取り入れる等
☆退職した医療従事者・専門家などが公営住宅に常駐する。

計画の段階から医療・福祉の専門家が入って高齢者が多いコミュニティになった時を見据えて話し合いをすることが大切であり、高田病院から遠い公営住宅に関しては、より考えていかなければいけない。

【交通手段】
・自分で運転できない(しない)高齢者にとって、タクシーやバスは使い勝手が良いとは言えず、自由に行動することができない。
⇒
☆行政と民間が協力した第三セクターが運営する巡回型バスを設置する。
→使い勝手・ルート（病院を入れる等）・時間帯・便数などを考えていけないか？
☆買い物サービスの充実
→代行だけではなく、「一緒に買い物をする」「荷物を持つ」などの補助的で高齢者が動きやすいサポート。

高齢者はなかなか自由に動けないため、若者が普段行っているような場所でも楽しいと言っていた。籠ってしまうのではなく、交流できる場や手段があることが大切。

【医療施設】
・震災後は、支援という形で震災前より医療が充実しているが今後も持続できるか？
・高田一中の仮設診療所が無くなったら不安
・高田はもともと医療過疎地域。しかも超高齢社会であり、自助努力は難しい。

⇒
☆より医療過疎の地域に、月１回でも診療車を巡回させられないか。

【グループ討議①の整理】
高齢者にやさしいまちとして、高齢化コミュニティへのサポート、交通機関及び医療施設の充実を図る。

グループ討議②　グループ移動によりメンバー変更

○地域コミュニティでの福祉の役割

【医療・福祉の領域】
・高齢者だけでなく子どもも関係している。極端に言えば、母親のお腹の中にいる子どもから、お年寄りまで対象は幅広い。
・起こりうることへの対応だけではなく、予防策を考えていくべき。
・県立病院だけに頼らず、開業医を増やしていく努力。（人口が少なく収入も少ない高田では難しいが。）
・何をするにも、高田は財政面との兼ね合いがある。
・平均寿命が延びているので社会参加と自立の意識を持ってもらわないといけない。
・対象を絞るのではなく全体的に考えていく必要がある。
⇒
☆各世代が「役割」を持つ。

【高齢者が元気であるために】
・高齢者は知識・経験が豊富。学校教育で、各地域、年数回交流の場を設けている。
・震災時、コミュニティはしっかりしていた。（見守りや高齢者世帯の把握など）
・病気になる前に、予防をすること→孫の世話など役割を持つ
⇒
☆高齢者サポートと子どもの教育の場のタイアップ。
☆世代間交流促進
→地域コミュニティの中に、各世代が交流できる場を取り入れていく。

【子育てしやすい環境作り】
・現在は１町に１つ保育園があるが、子どもの数は減少。子どもを増やすためには子育てしやすい環境作りが必要。
⇒
☆アパート・仮設ではなく世代間交流のできる戸建整備
☆地域とのつながり強化
→小さなことが「地域」の始まりになり、顔が知れている関係があることで、安心かつ安全な環境になる。
☆子どもたち同士の交流促進
→高田市内全体の園児は約 600 人。保育園のうちから各園を超えた交流をもつことで、父兄の輪もできる
☆十数年後、市内の中学校を１校増やす

今はお母さんひとりで行っているかもしれない子どもの送り迎えも、顔が見える関係を築くことで、安心かつ安全になり、周囲に頼める可能性も生まれる。

グループ討議③　グループ討議②の経過検証とポイント整理。

○地域コミュニティの充実が福祉の充実につながるという視点を継続

☆世代間交流の促進として、子どもたちとお年寄りが一緒にいれる場所を作る(壁で仕切らない)
→デイサービスと保育園が併設した施設の設置など。
☆モデルケースとして小中一貫校を作れないか
→もともと、中学生が小学生を、高学年が低学年の面倒を見ていた地域において、行事や修学旅行を一緒に行うことで子ども達の中での地域意識を高める
☆市外へ移った家族からのサポート
→ふるさと納税など財政面での参画促進。
☆福祉サービス窓口の一本化
→高齢者・子ども・障がい者、身体面・精神面、行政・民間など対象や管轄を問わず「ここに行けばすべて聞ける！」という窓口を設置。
→さまざまなサービスの周知と橋渡しの場ともなる。1か所にあると利用しやすい。

【その他】
☆障がい者の収入の安定として「いいもの」のより良い宣伝方法の検討。
→障がい者も生産/加工に携わる物の「ブランド化」により、価値を上げ高田を潤す。
☆健常者も障がい者も、働く場所も住む場所も、日常生活の場で交流できる環境づくり

(4) ワークショップ検討経過

内容	提案意見
医療・福祉	＜全体＞ ・公営住宅に医療・福祉サービスを設置/併設。) ・退職した医療従事者・専門家の公営住宅への常駐。 ＜医療＞ ・医療過疎の地域への診療車による巡回診療 ＜福祉＞ ・「見守り」を目的としたカメラの設置 ・第三セクターが運営する巡回型交通機関の整備 ・高齢者への買い物サービスの充実 ・福祉サービス窓口の一本化 ・健常者も障がい者も日常生活の場で交流できる環境 ＜地域コミュニティ充実との連携＞ ・各世代が「役割」を持つ ・高齢者サポートと子どもの教育の場のタイアップ ・世代間交流促進 ・中学校を1校増やす ・小中一貫校の整備 ・財源面での、関係者の参画 ・高田の「いいもの」のブランド化とより良い宣伝方法の検討

医療、福祉の新しいまちづくりイメージ

具体的に、どうすれば

高齢者が多いコミュニティーが増える

- サポート
- 生きがいの場 ／ 自分たちが自立意識を持つことができることを
  集会所以外で集まれる、参加できる
- 退職した医療従事者、専門家を採用して常駐
- 災害公営住宅の設備なり、10、20年後にデイサービスなり福祉、介護サービスが受けられるように現段階から計画

高田病院（医療施設）への移動力

- 運転できない方へやさしいまち
  買い物に一緒に行って、荷物を持つ等

バス：病院ルートのバス、第三セクター
使い勝手：ルート、時間帯、便数

病院がない所に病院・開業医
高田一中の仮設診療所の継続

世代間交流

地域コミュニティーにおける福祉の役割

人口を増やす ← 子育てしやすい環境

地域コミュニティの醸成

子育てしやすい

世代間交流 → 各世代が役割を持つ

顔が知れている関係

子どもからの輪が広がる → 安心・安全

範囲

8町⇒1地区 行事
保育所・学校単位
↓
人口としては
陸前高田を1つで語れる

保育所の時から一緒に何かをやる
↓
小学校に上がれば同級生

行事
修学旅行を
一緒にやる

○市内の中学校を1校増やす

小・中一貫校

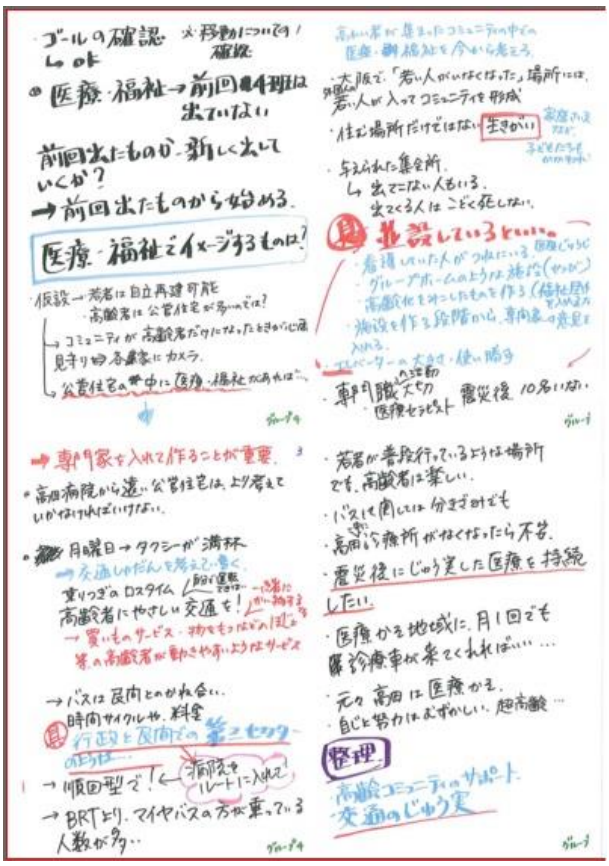
高学年が低学年の生徒をみていく

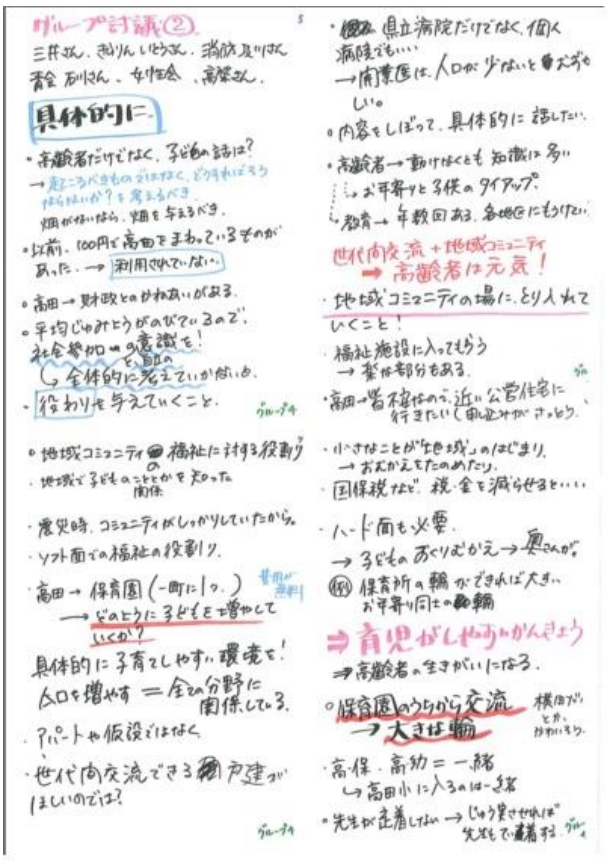
ハード面
保育園 デイサービス

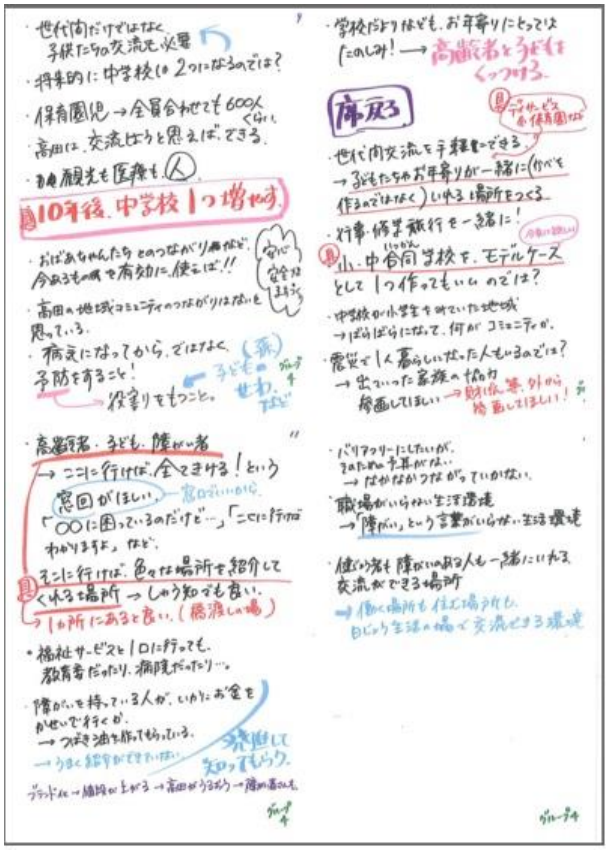
○子育てと高齢者の集まる場が併設している施設

○福祉サービス窓口の一本化 情報 橋渡し
(高齢者, 子育て, 障がい, 精神的な部分…)

・働く場の活性化, 安定した収入 バリアフリー
・良いものを作っているので更なる情報発信 交流を増やす
↓
お互い理解の場


ゴールの確認
移動について！
医療・福祉→前回4班は出ていない
前回出たものが、新しく出ていくか？
→前回出たものから始める。
医療・福祉でイメージするものは？
仮設→若者は自立再建可能
高齢者は公営住宅が多いのでは？
コミュニティが高齢者だけになったときの心配
見守り＠各家にカメラ
公営住宅の中に医療・福祉があれば…
専門家を入れて作ることが重要。
高田病院から遠い公営住宅は、より若者でいかなければいけない。
月曜日→タクシーが満杯
交通しかたを考えて、巻く。
買いもの
高齢者にやさしい交通を！
バスは民間とのかね合い。
時間サイクルや、料金
行政と民間の線引き
→順回型で！
→BRTより、マイヤバスの方が乗っている人数が多い。
高い若者が集まったコミュニティの中での医療・福祉施設を今から考える。
大阪で「若い人がいなくなった」場所には、若い人が入ってコミュニティを形成
住む場所だけではない「生きがい」
与えられた集合所。
出てこない人もいる。
出てくる人はごく一部しかいない。
仮設している人たちは。
看護していた人が中心にいる。
グループホームのような施設（やわらか）
高齢化をみこした若者を作る（福祉関係）
施設を作る段階から、専門家の意見を入れる。
スペシャリストの支援・使い勝手
専門職の活用
医療センター
震災後、10名いない。
若者が普段行っているような場所でも、高齢者に優しい。
バスは周辺には分まだ必要
高田診療所がなくなったら不安。
震災後にじゅう実した医療を持続したい。
医療かを地域に。月1回でも巡診療車が来てくれればいい…
元々高田は医療かる。
自ら努力はむずかしい。超高齢…
整理
高齢コミュニティのサポート
交通のじゅう実


グループ討議②
三井さん、もりんいとうさん、消防及川さん
警金 刑さん、女性会 、高橋さん、
具体的に
高齢者だけでなく、子ども達の話は？
→遊ぶところなどものはなく、どうすればそうなればいいか？を考えるべき。
畑がないなら、畑を与えるべき。
以前、100円で高田をまわっていたそのものがあった。→利用できていない。
高田→財政とのかね合いがある。
平均じゃなくてひとりひとりの意識を！
全体的に考えていかないと。
役割りを与えていくこと。
地域コミュニティの福祉に対する役割
地域で子どものことなどを知った関係
震災時、コミュニティがしっかりしていたから。
ソフト面での福祉の役割り。
高田→保育園（一町に1ヶ）
→どのように子どもを増やしていくか？
具体的に子育てしやすい環境を！
人口を増やす＝全ての分野に関係してる。
アパートや仮設ではなく
世代間交流できる戸建てがほしいのでは？
県立病院だけでなく、個人病院でも…
→南東医は、人口が少ないと●だから。
内容をしぼって、具体的に話したい。
高齢者→動けなくとも知識は多い
お年寄りと子供のタイアップ。
教育→年数回あり、各地区にもうけたい
世代間交流＋地域コミュニティ
→高齢者は元気！
地域コミュニティの場に、とり入れていくこと！
福祉施設に入ってもらう
→楽な部分もある。
高田→皆様なのご近い公営住宅に行きたい（田北エリアがよりよい）
小さなことが"生き甲斐"のはじまり
→おでかえてたのめたり。
国保税など、税金を減らせるとよい。
ハード面も必要。
→子どものあそびかえ→奥さんが。
保育所の輪ができれば大きい。お年寄り同士の●輪
⇒育児がしやすいかんきょう
⇒高齢者の生きがいになる。
保育園のうちから交流
→大きな輪
高保・高幼＝一緒
↳高田小に入るのは一緒
先生が定着しない→じゅう実させれば先生も定着する。


世代間だけではなく子供たちの交流も必要
将来的に中学校も2つになるのでは？
保育園児→全員合わせても600人くらい
高田は、交流しようと思えば、できる。
観光も医療も人。
10年後、中学校1つ増やす
おばあちゃんたちとのつながり方など、今あるもので有効に使えば！！
高田の地域コミュニティのつながりはないと思っている。
病気になってからではなく、予防をすること！
役割りをもつこと。
高齢者・子ども・障がい者
→ここに行けば、全てできる！という窓口がほしい。
「○○に困っているのだけど…」「ここに行けばわかるよ」など。
そこに行けば、色々な場所を紹介してくれる場所→しょう知でも良い。
1ヶ所にあると良い。（居酒屋の場）
福祉サービスと1ヶに行っても、教育者だったり、病院だったり…。
障がいを持っている人が、いかにお金をかせいでオドくか。
→つばき油を売ってもらっている。
→うまく給与ができていない。
ブランド化→値段が上がる→高田がうるおう→障がい者のため
学校だよりなども、お年寄りにとっては「たのしみ！」→高齢者と子どもをくっつける。
麻辰3
世代間交流を手軽にできる
→子どもたちのお年寄りが一緒に（かべを作るのではなく）いれる場所をつくる。
行事・修学旅行を一緒に！
小・中合同学校を、モデルケースとして1つ作ってもいいのでは？
中規模の小学生を持っていた地域
→ばらばらになって、何がコミュニティか。
震災で1人暮らしだった人もいるのでは？
→出ていった家族の協力
→財政、第、外から検討してほしい！
バリアフリーにしたいが、そのための予算がない
→だからなかなかつながっていかない。
職場がいられない生活環境
→「障がい」という言葉がいるが、生活環境
使う方も障がいのある人も一緒にいれる交流ができる場所
→働く場所も住む場所も、自ぶん生活の場で交流できる環境